書評

木村英一編 慧遠研究 研究篇

間野潜龍

本書は京都大学人文科学研究所の中国中世思想史研究班において推進された協同研究の成果の一つであり、すでに発表された「慧遠研究遺文篇」とあわせて一つになるものである。その遺文篇については、かつて本誌の四十一巻二号に滋野井恬氏が詳しく紹介しておられるので、今更改めてのべる必要もないが、慧遠法師の遺文に対する厳密な校訂と、それに加えられた詳細な訳注作成の努力をもとにしてこそ、本書のようなすぐれた成果が結実するのであって、十年にも及ぶ長い月日を通じて、たゆまず続けられたその協同研究こそ、まことに美しく、また厳しいものであったと思われるのである。

さて本書は研究篇の名の如く、慧遠の教学、思想、あるいはその周囲の問題、後世への影響など、慧遠を中心としてあらゆる面から討究した十三篇の論文と、慧遠の年譜とから成り立っている。そして論文を執筆された十三人の顔ぶれをみると、この問題をとり扱かうにふさわしい関西の諸先生方を網羅しておられ、京都大学人文科学研究所の関係者をはじめ、大阪や滋賀など近畿の各大学からはせ参じ、本学からも横超・野上・安藤三教授がともに麗筆を振って、本書に生彩を加えておられる。また遠くアメリカのワシントン大学からハーヴィッツ氏が一篇を寄稿して、本書の価値をいよいよ高からしめた。したがってそれぞれの論文について、できるだけ詳細に紹介し、また多くの問題について意見を申し上げたいのであるが、とても浅学の筆者には直ちに出来るものではなく、また紙幅の余裕も許されないので、以下簡略にその内容を伝えるにとどめたい。

まずはじめに塚本善隆氏の「中国初期仏教史上における慧遠」は、慧遠の生涯を彼が出家する迄と、道安門下として研鑽した時期、ならびに廬山に入って後の慧遠というように三期に分けて、それぞれ詳しく論述されている。特にその特色は彼の時代的背景をあます所なくとらえて、慧遠がその時代の中で如何に成長し、そして仏教者としての自己を形成していったかを、生き生きと描き出されたことで、慧遠の伝をこれほどにまでヴィヴィドに書かれたものは今までになかったのではないかと思われる。ただこれが総論的な役割を果たすものであるということで、それぞれの細部の問題については、他の諸篇に委ねられた個所が多い。

つぎに梶山雄一氏の「慧遠の報応説と神不滅論」は、最初にインドの輪廻説がウパニシャッドに於て完成し、インド思想に一つの革命をもたらしたことを論じ、つづいて慧遠から戴逵におくった三報論や、また慧遠の明報応論、沙門不敬王者論などによって慧遠の報応についての考え方を述べ、その報応輪廻・神不滅の理論をインド思想と対比しておられて、甚だ示唆に富

んだ論文である。ただこの戴逵が一一〇頁から数頁にわたって、いずれも載逵になっているのは、校正上の誤りと思われるが、不注意のそしりをまぬがれない。

横超慧日氏の「大乘大義章研究序説」ならびにハーヴィッツ氏の「大乘大義章に於ける一乘三乘の問題について」は、いずれも慧遠と鳩摩羅什との問答である大乘大義章を直接取り扱かった雄篇である。とくに前者は大乘大義章の研究が如何に大きい意義を持つものであるかを強調した上で、大乘大義章の成立の由来を述べ、大義章のできあがった基盤となる慧遠の仏教学とはどのようなものかについて、その研鑽の過程を辿り、さらに論争相手である鳩摩羅什の仏教学を調べ、最後に大義章の問題点を五項目に分けて列挙しておられる。そしてその問題点の一つである仏菩薩の法身について、あるいは大乘と小乘との問題については明解に説明された。願くば割愛された真如とそれの悟、修行方法における種々の課題などについても、さらに論述の筆を進められるよう希望してやまない次第である。

藤吉慈海氏の「慧遠の浄土教思想」、および野上俊静氏の「慧遠と後世の中国浄土教」は、慧遠と浄土教との関係を論述したものである。前者ではまず慧遠以前の中国浄土教の一般をのべ、後漢や三国に阿弥陀仏の浄土に言及した経典が流伝して、その信仰がすでに行なわれていたことを論じ、慧遠の浄土教思想は主として般舟三昧経にもとづき、さらに羅什との問答などを契機として一層それが慧遠の心に確信され、白蓮社の結成により実践行となったことをのべておられる。また後者は慧遠に対して後世の浄土教家がどのように見ていたかを、隋唐初、中唐、さらに宋代にいたる多くの浄土教家の述作を通して論じたもので、慧遠の人間像を把握する一つの手段を提示した好個の論文である。ところで慧遠の浄土教に関して次のような点を考えることができないだろうか。慧遠の白蓮社には一百二十三人が集まり、念仏三昧によって結ばれた集団であったというが、実はその具体的な内容が未だ把握できていない現状である。たとえばその集団が如何にして維持されたものか、あるいはその変遷がどのようであったかなど、もっと知りうる手掛りがないものだろうか。はじめの塚本氏の論文中に、慧遠歿後ほとんど建康へ移っていったことが述べられているが、それなら何故廬山を捨てねばならぬ理由があったかなどを、白蓮社という集団の過程で把握できないものだろうかと思うのである。

安藤俊雄氏の「廬山慧遠の禅思想」は、慧遠における禅思想が安世高系の小乘禅と、支讖系の大乘禅を綜合したものであると論じ、般舟三昧から慧遠の禅思想をみちびき出しておられる。しかし結局慧遠は般舟三昧を完全に消化しきれず、あくまでも小乘禅を基本と考えた所に廬山禅の性格があるという点を強調された。中国仏教史上の禅思想の発展の中に、慧遠がどのような位置を占めるかを明らかにされた本篇は、まことにすぐれた労作といえよう。

木全徳雄氏の「慧遠と宗炳をめぐって」は、慧遠や宗炳らが活躍した東晋から宋時代の建康、あるいは会稽などの仏教の地域差を社会思想史的に考察し、ついで慧遠の意識の中に考えられている沙門とは、社会的に如何なる形のものかを検討し、その礼思想から経済思想に及び、さらに慧遠の儒教に対する考え

を求めたのである。つぎに改めて「長安の社会思想」と題して道恒の釈駮論をとりあげ、慧遠、孫綽、宗炳らの思想と対比し、最後に宗炳の社会思想をとりあげて、とくに神不滅や応報の問題について慧遠と比較し、宗炳の仏教がどのようなものであったかを規定しておられる。甚だ構想雄大で興味深く読んだが、ただ道恒の釈駮論をもって、長安の社会思想ときめつけてしまうのは、かなり危険なことでないかと思うのである。この場合長安を論ずるならばもっと広く検討していただきたかった。

村上嘉実氏の「慧遠の方外思想」は慧遠の中にある隠逸的な思想を抽出して、沙門と俗人との立場の相違、儒教と仏教との本末関係をどう考えていたかを述べ、さらに慧遠のいう「宗極」あるいは「神」（こころ）という概念を究明したものである。また福永光司氏の「慧遠と老荘思想」は、慧遠の著作の中にどのような老荘的表現が見られるかを探究し、僧肇における老荘思想と対比しておられる。そして具体的に礼教とか因果応報の問題について詳細に論述され、結局僧肇における老荘思想の比重にくらべて、慧遠における老荘思想はそれほど重要でないことを論証しておられる。

島田虔次氏の「桓玄―慧遠の礼敬問題」は、両者の礼敬についての論争の経過をくわしく解釈して、かつて板野長八氏が東京学報（東京一一の二）に論じられた所説に疑問を提出され、桓玄が企図した沙門敬王者の方向が挫折したのは、王者の実力不足によると規定された。この意見はそののち昭和三十七年十一月三日に京大人文科学研究所で行なわれた東洋史談話会大会の席上でも、さらに敷衍して論じられたが、「王権と仏法」という中国仏教史上の大きな問題の中で、甚だ重要な時期を劃する課題である。

牧田諦亮氏の「慧遠著作の流伝について」は、中国ならびに日本における慧遠著作の流伝を、綿細に解説されたもので、同氏のたえざる努力にはいつも敬服するものである。また木村英一氏は「中国中世思想史上に於ける廬山」と題して、慧遠の住んでいた廬山が陶潛などの文人や、陸修静などの道教者にも関係が深く、仏教や道教と如何に密接なつながりがあったかを、六朝から唐、五代、宋に及んで概観された。すなわち地理的な面から本書の裏付けをされた訳で、これを以て十三篇の結びともなっている。なお付録として加えられた竺沙雅章氏の「廬山慧遠年譜」は、その時代的な背景と合せて慧遠を知るのに便利である。

以上において本書の一端を紹介した次第であるが、あるいは執筆された方々の意図を正しく伝えていない点が多々あるのではないかと恐れている。しかしもはやこれ以上書きしるす余裕もないので、詳しいことは直接手にとって閲読されることを希望する。ただ慧遠といえば、吾々浄土教の流れをくむ者にとって、何らかの親縁を感じさせるもので、その気持がまた本書に対してより親近感を抱かせるのである。そして吾々の期待にも十分にこたえてくれるのが本書であり、まことに内容、外装ともに豪華な書ということができるであろう。